OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『朱子語類』巻第一百　邵子之書 譯注（その三）
Author(s)	辛, 賢
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2016, 56, p. 1-20
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56933
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『朱子語類』卷第一百
邵子之書 譯注（その三）

辛　　賢

【凡例】

一、本譯注は、宋・黎靖德編『朱子語類』卷一百「邵子之書」の譯注である。

一、底本には、理學叢書『朱子語類』（中華書局）を用いた。標點は適宜改めており、底本と異なるところがある。

一、本譯注は、本文（【　】）、〔校注〕、〔譯〕、〔注〕で構成される。本文は、底本による各章の分條にしたがって【　】附きの番號で示した。

一、本文・〔譯〕中の［　］は割注部分である。〔譯〕では、文意を明瞭にするために補ったものがあり、括弧（　）に括って示した。

一、〔校注〕は、以下の校本を參照し、次の略稱を用いた。

『朝鮮古寫　徽州本朱子語類』（中文出版社）　…楠本本
『朝鮮整版　朱子語類』（中文出版社）　…朝鮮整版
『朱子語類』（正中書局）　…正中書局本
『朱子語類大全』（和刻本・中文出版社）　…和刻本

一、〔注〕における『朱子語類』の引用は、『語類』と略稱した。

一、本譯注の作成において頻繁に使用する參考文献としては、以下の通りである。

『晦庵先生朱文公文集』……『文集』
『伊川擊壤集』……『伊川擊壤集』
『宋元學案』（標點本、中華書局、一九八六年）……『宋元學案』
『宋元學案補遺』（世界書局影印、一九七四年）……『宋元學案補遺』
理學叢書『邵雍集』（標點本、中華書局、二〇一〇年）……『邵雍集』
理學叢書『二程集』上下二冊（標點本、中華書局、一九八一年）……『二程集』
理學叢書『張載集』（標點本、中華書局、一九七八年）……『張載集』
三浦國雄『「朱子語類」抄』（講談社學術文庫、二〇〇八年）
陳榮捷『朱子門人』（學生書局、一九八二年）

方彦壽『朱熹書院与門人考』（華東師範大學出版社、二〇〇〇年）
田中謙二「朱門弟子師事年攷」（『田中謙二著作集』第二巻に所收、汲古書院、二〇〇一年）
垣内景子 他『『朱子語類』譯注 卷一～三』（汲古書院、二〇〇七年）
垣内景子『『朱子語類』譯注 卷七・十二・十三』（汲古書院、二〇一〇年）
興善宏 他『『朱子語類』譯注 卷十～十一』（汲古書院、二〇〇九年）
中純夫 他『『朱子語類』譯注 卷十四』（汲古書院、二〇一三年）
吾妻重二 他『『朱子語類』譯注 卷八十四～八十六』（汲古書院、二〇一四年）
垣内景子 他『『朱子語類』譯注 卷百十三～百十六』（汲古書院、二〇一二年）
垣内景子 他『『朱子語類』譯注 卷百十七～百十八』（汲古書院、二〇一四年）
山田俊『『朱子語類』譯注 卷百二十五』（汲古書院、二〇一三年）
野口善敬 他『『朱子語類』譯注 卷百二十六（上・下）』（汲古書院、二〇一三年）

【44】(校1)「性者、道之形體。心者、性之郛郭。」康節這數句極好、蓋道即理也。如「父子有親、君臣有義」是也。然非性、何以見理之所在。故曰「性者、道之形體。」仁義禮智性也、理也、而具此性者心也。故曰「心者、性之郛郭。」　［砥］

〔校注〕
（校１）楠本本は、本條なし。
〔譯〕
朱子「『性は道の形體である。心は性の郛郭である』と。康節の、この數句はとてもうまい。思うに、道はすなわち理であるということだろう。たとえば、『父子に親有り、君臣に義あり』というのがそれである。では、性によらずして、どうして理の存在が分かるだろうか。だから、『性は道の形體である』というのである。仁義禮智は性であり、理であり、そしてこの性を具えているのが心である。だから、『心は性の郛郭』というのだ。」　［劉砥］

【45】器之(1)問中庸首三句(2)。先生因舉(校1)「性者、道之形體」之語。器之云「若說『道者、性之形體』、却分曉。」曰(校2)「恁地看、倒了。蓋道者、事物常行之路(3)。皆出於性、則性是道之原本。」木之曰「莫是性者道之體、道者性之用否。」曰「模樣是如此。」　［木之］(4)

〔校注〕
（校１）楠本本は、「先生因舉」を「先生因舉康節」に作る。
（校２）楠本本は、「曰」を「先生曰」に作る。

〔譯〕

器之は『中庸』の首三句について質問した。先生は、それに關聯して（康節の）『性は道の形體である』の語を取りあげられた。

器之「『道は性の形體である』と言うなら、むしろよく分かるのですが。」

朱子「それは逆だ。思うに、道は事物の常なる通路である。すべての事物は性から出るから、性は道の根本である。」

木之「性は道の形體であり、道は性の用であるということでしょうか。」

朱子「そのようだ。」　［錢木之］

〔注〕

（1）**器之**　陳埴、字は器之。永嘉年間の人。潛室先生と稱された。温州永嘉縣（浙江省）の人。『宋元學案』卷四九・卷六五にその傳がある。陳榮捷『朱子門人』（學生書局、一九八二年）百五十頁に詳述されている。

（2）**中庸首三句**　「天命之謂性。率性之謂道。修道之謂教。」

（3）**蓋道者、事物常行之路**　『中庸』第一章の「朱注」に「道、猶路也。人物各循其性之自然、則其日用事物之間、莫不各有當行之路。是則所謂道也。」とあり、また「道者、日用事物當行之理。皆性之德、而具於心、無物不有、無時不然。」とある。

（4）**木之**　記錄者の錢木之。字は子山、常州晉陵縣（江蘇省武進縣）の人。永賀縣に寄寓していたとされる。

【46】方賓王(1)以書問云「『心者、性之郛郭』、當是言存主(2)統攝處。」可學(校1)謂「郛郭是包括。心具此理、如郛郭中之有人。」曰(校2)「方說句慢。」問「以窮理爲用心於外、是(校3)誰說。」曰「是江西說(3)。」又問「『發見』說話、未是。如此、則全賴此些時節、如何倚靠。」曰「湖南皆如此說。」曰「孟子告齊王、乃是欲因而成就之、若只執此、便不是。」曰「然。」又問「『穀種之必生、如人之必仁。』(4)如此、却是以生譬仁。穀種之生、乃生之理、乃得此生理以爲仁(5)。」曰「『必』當爲『有』。」又解南軒「發是心體、無時而不發」(6)、云「及其既發、則當事而存、而爲之宰者也。」某謂「心豈待發而爲之宰。」曰「此一段強解。南軒說多差。(校4)」　［可學］

〔校注〕

（校1）楠本本は、「可學」を「某」に作る。

（校2）楠本本は、「曰」を「先生曰」に作る。

（校3）楠本本は、「是」の字なし。

（校4）楠本本は、「南軒說多差」の直後に「又曰論胡文定說輒事極看得好」の一文有り。

〔譯〕

方賓王は書簡を出して問うに「『心は性の郛郭である』とは、心は性を保ち統御するというべきである」と言う。

可學「郛郭は包括する意味です。心に理が具わるのは、郛郭のなかに人がいるようなものですね。」

朱子「方君の説はルーズで物足りない。」

可學「理を窮めることは心を外部に用いる、という説は、誰の説でしょうか。」

朱子「江西の説だ。」

可學「『發見』の説は、正しくないです。どうして時節に頼り切ることができるでしょう。」

朱子「湖南ではみなその説に據っている。」

可學「孟子が齊王に告げたのも、この説に因って事を成就しようとしてそれに執着するのは正しくない、と。」

朱子「そうだ。」

可學「『穀種に必ず生があるのと同じように人には必ず仁がある』と。この説は「生」を「仁」に譬えたものです。穀種の生は、つまり生の理であり、この生の理をもって仁と見なすことができますね。」

朱子「『必』とは、『有る』ということだ。」

南軒の「發とは心體であり、時無くしては發せず」を解して（次のように）仰った。

朱子「南軒の「既發」とは、（心は）事に當って存し、（そこではじめて）主宰となるということだ。」

朱子「どうして發するを待って心が主宰になるだろうか。」

朱子「この當たりは牽強附會である。南軒の説は間違いが多い。」　［鄭可學］

〔注〕

（1）**方賓王**　方誼、字は賓王。嘉興府嘉興縣（浙江省）人。『文集』卷六十「答周南仲」に「方賓王每書來説得道理、儘有歸著、知與遊從、可謂得友。」とあり、朱子は、方賓王のことを「方君」「朋友」「老兄」と稱し、朱子と師友の間柄であったとされる。陳榮捷『朱子門人』（學生書局、一九八二年）三四頁に詳述されている。

（2）**存主**　保ち續ける。『語類』卷六十『孟子』盡心上「霸者之民章」に「『存神、過化』、程説甚精、正得孟子本意。過、是身所經歷處、無不感動、如「黎民於變」、便是化。存、是存主處、不是主宰、是存這事、這事便來應。」とある。

（3）**江西説**　「或問「靜時見得此心、及接物時又不見。」曰「心如何見得。接物時只要求箇是。應得是、便是心得其正。應得不是、便是心失其正、所以要窮理。且如人唱喏、須至誠還他喏。人問何處來、須據實説某處來。即此便是應物之心、如何更要見此心。浙間有一般學問、又

是得江西之緒餘、只管教人合眼端坐、要見一箇物事如日頭相似、便謂之悟、此大可笑。夫子所以不大段說心、只說實事、便自無病。至孟子始說『求放心』、然大概只要人不馳騖於外耳、其弊便有這般底出來、以此見聖人言語不可及。」」（『語類』卷一百二十一朱子十八「訓門人」九）

（4）**穀種之必生、如人之必仁**　程伊川の説。「問「仁與心何異。」曰「心是所主處、仁是就事言。」曰「若是、則仁是心之用否。」曰「固是。若説仁者心之用、則不可。心譬如身、四端如四支。四支固是身所用、只可謂身之四支。如四端固具於心、然亦未可便謂之心之用。」或曰「譬如五穀之種、必待陽氣而生。」曰「非是。陽氣發處、却是情也。心譬如穀種、生之性便是仁也。」」（『二程集』河南程氏遺書卷十八「劉元承手編」）

（5）「叔器問「先生見教、謂『動處是心、動底是性。』竊推此二句只在『底』『處』兩字上。如穀種然、生處便是穀、生底却是那裏面些子。」曰「若以穀譬之、穀便是心、那爲粟、爲菽、爲禾、爲稻底、便是性。康節所謂「心者、性之郛郭」是也。包裹底是心、發出不同底是性。心是箇沒思量底、只會生。又如喫藥、喫得會治病是藥力、或涼、或寒、或熱、便是藥性。至於喫了有寒證、有熱證、便是情。」（『語類』第五、性理二「性情心意等名義」）

（6）問「呂與叔云『未發之前、心體昭昭具在。已發乃心之用。』南軒辨昭昭爲已發、恐太過否。」曰「這辨得亦沒意思。敬夫太聰明、看道理不子細。伊川所謂『凡言心者、皆指已發而言』、呂氏只是辨此一句。伊川後來又救前說曰『「凡言心者、皆指已發而言」、此語固未當。心一也、有指體而言者、「寂然不動」是也。（『語類』卷第六十二、中庸一「第一章」）

【47】(校)或問「康節云『能物物(1)、則吾爲物中之人。』(2)伊川曰『不必如此說。人自是人、物自是物。』(3)伊川說得終是平。」先生曰「自家但做箇好人、不怕物不做物。」

〔校注〕

（校）楠本本は、この條なし。

〔譯〕

質問「康節先生は『よく他物を自由に驅使できるのは、自分が物の側から物を見る人になることだ』と仰います。ところが、伊川先生は『必ずしもそうとも言えない。人は人であり、物は物である』と仰いました。伊川先生の説かれることが適切でしょうか。

朱子「自分がよき人となれば、物に使役されることなど、心配にならないのだ。」

〔注〕

（1）**物物**　物を物とする。他物を自由に驅使する。「浮遊乎萬物之祖、物物而不物於物」（『莊子』山木篇）、成玄英疏に「物不相物、則無憂患」とある。

（2）**能物物、則吾爲物中之人**　「所以謂之反觀者、不以我觀物也。不以我觀物者、以物觀

物之謂也。既能以物觀能物。又安有我於其間哉」（『觀物内篇』）とあり、邵伯温解に「能反觀者、以萬物皆備於我、自我而觀之也。自我而觀物、則能物物而不物於物。不物於物、故能以物觀物、能以物觀物者、能無我故也」（『性理大全書』巻十）とある。この他、「不我物、則能物物」（『觀物外篇』）とある。

（３）「堯夫嘗言能物物、則我爲物之人也。不能物物、則我爲物之物也。亦不消如此人自人、物自物、道理甚分明。」（『二程遺書』）、「子曰、堯夫云能物物、則我爲物之人也。不能物物、則我爲物之物也。夫人自人、物自物、其理昭矣」（『二程粹言』巻下）

【48】或誦康節詩云、「若論先天一事無、後天方要著工夫。」(1)先生問「如何是『一事無』。」曰(校)「出於自然、不用安排。」先生默然。廣云「『一事無』處是太極。」先生曰、「嘗謂太極是箇藏頭底物事(2)、重重推將去、更無盡期、有時看得來頭痛。」廣云「先生所謂『迎之而不見其首、隨之而不見其後』(3)、是也。」　［廣］

〔校注〕

（校）楠本本は「曰」を「對曰」に作る。

〔譯〕

ある人が康節の詩の『若し先天を論ずれば一事無し、後天は方に工夫が必要だ』と誦した。

朱子「どうして『一事無』であるのか。」

ある人「自然より出づることから、人爲的な案配が要りません。」

先生は何も仰らなかった。

輔廣「『一事無』とは、太極です。」

朱子「かつて、太極というものは頭を隠していると言ったことがあるが、太極についてはどんどん推論を重ねてもきりがなく、頭が痛くなる時がある。」

輔廣「仰ることは、『それを迎えてもその首が見えない、それに従うもその後ろが見えない』と、そういうことですね。」　［輔廣］

〔注〕

（１）「若問先天一字無、後天方要著工夫。抜山蓋世稱才力、到此分毫强得乎。」（『伊川擊壌集』「先天吟」）と、原文は「若問先天一字無」に作る。

（２）「某常說、太極是箇藏頭底、動時屬陽、未動時又屬陰了」（『語類』巻九十四 周子之書「太極圖」）とある。

（３）「迎不見其首、隨不見其後、執古之道、以語今之有、以知古始、是謂道已。」（『老子』第十四章）

【49】邵子「天地定位、否泰反類」一詩(1)、正是發明先天方圖之義。先天圖傳自希夷、希夷又自有所傳。蓋方士技術用以修煉、參同契所言是也(2)。　［方子］

〔校注〕

なし

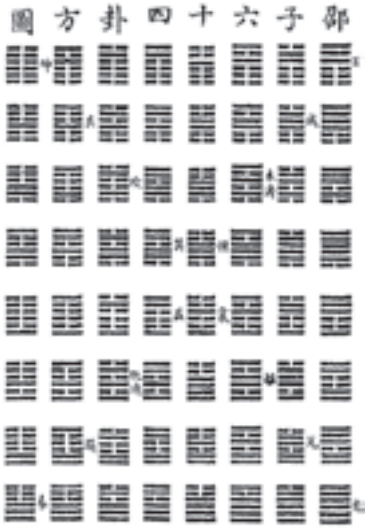
〔譯〕

邵子の詩、「天地定位、否泰反類」（「大易吟」）は、まさに先天方圖の義を明らかにしたものだ。先天の圖は希夷（陳摶）から傳わる。希夷もまたよって傳わる所がある。思うに方士の技術には修煉が用いられるが、參同契に述べられているのがそのことである。　［李方子］

〔注〕

（1）「天地定位、否泰反類。山澤通氣、損咸見義。雷風相薄。恒益起意。水火相射、既濟未濟四象相交、成十六事。八卦相盪爲六十四」（『伊川擊壤集』「大易吟」）とある。説卦傳に「天地定位、山澤通氣、雷風相薄、水火不相射」とあり、これに依據したもの。『文公易説』に「康節天地定位否泰反類詩八句、是説方圖中兩交股底。且如西北角乾、東南角坤。是天地定位、便對東北角泰、西南角否。次乾是兌、次坤是艮、便對次否之咸、次泰之損。後四卦亦如是共十六卦」とある。つまり、天地（乾䷀坤䷁）否䷋泰䷊、山澤（艮䷳兌䷹）損䷨咸䷞、雷風（震䷲巽䷸）恒䷟益䷩、水火（坎䷜離䷝）既濟䷾未濟䷿の計十六卦を四つにグループ分けしているが、「伏羲六十四卦方位圖」から方圖を抜き出してその位置關係を表したのが、「邵子六十四卦方圖」（『周易圖説』卷下所收）である（〔圖版１〕邵子六十四卦方圖を參照）。また、この方圖について、『周易傳義附錄』（卷首下）に次のように詳述している。「愚因邵子大易吟、欲以方圖分作四層看。其第一層、乾坤否泰四卦、所謂天地定位否泰反類也。然以周圍二十八卦横直觀之。皆乾一坤八之卦、此見天地定位之不可易也。其第二層四隅兌艮咸損四卦、所謂山澤通氣、損咸見義也。然以周圍二十卦横直觀之。亦皆兌二艮七之卦、此見山澤通氣之象也。其第三層四隅爲坎離既濟未濟四卦、所謂水火相射、既濟未濟是也。然以周圍十二卦、横直觀之、亦皆離三坎六之卦、此足以見水火不相射之象也。其最裏一層爲震巽恒益四卦、所謂風雷相薄、恒益起意、其象亦可見矣。以此言之、邵子之詩曉然足以見先天法象自然之妙」『周易傳義附錄』（卷首下）

（2）「邵子發明先天圖、圖傳自希夷、希夷又自有所傳。蓋方士技術用以修煉、參同契所言是也」（『周易參同契考異』）と、同様の記述が見える。先天圖と『周易參同契』の煉丹術との關わりについては、「先天圖與納音相應、蔡季通言與參同契合。以圖觀之、坤復之間爲晦、震爲初三、一陽生。八日爲兌、月上弦十五日爲乾、十八日爲巽。一陰生二十三日爲艮、月下弦。坎離爲日月。故不用參同、以坎離爲藥、餘者以爲火候」（『周易參同契考異』卷首）とある（〔圖版２〕月體納甲圖を參照）。



〔圖版１〕邵子六十四卦方圖
（『周易圖説』巻下に所收）

〔圖版２〕月體納甲圖（清・胡渭『易圖明辨』所收）

【50】(校1)何巨源(校2)(1)以書問。「邵子詩(校3)『須探月窟方知物、未躡天根(2)豈識人。』(3)又先生贊邵子(校4)『手探月窟、足躡天根』(4)、莫只是陰陽否。」先生答之云「先天圖自復至乾、陽也。自姤至坤、陰也。陽主人、陰主物。『手探足躡』、亦無甚意義。但姤在上、復在下。上、故言『手探』。下、故言『足躡』。」　［廣］

〔校注〕

（校１）楠本本は、本條と次の【51】條と、順番が入れ代わっている。

（校２）楠本本は、「何巨源」を「池陽士人何巨源」に作る。

（校３）楠本本は、「邵子詩」を「邵子詩有曰」に作る。

（校４）楠本本は、「又先生贊邵子」を「又先生贊邵子有曰」に作る。

〔譯〕

何巨源、手紙で質問した。

何巨源「康節先生の詩に『月窟を探してまさに物を知るべきであるのに、未だ天根すら躡んでいない。どうして人を識ろう』とあります。また先生は康節先生の『手は月窟を探し、足は天根を躡む』の一首を稱えていますが、これは陰陽に關わりがあるのでしょうか。」

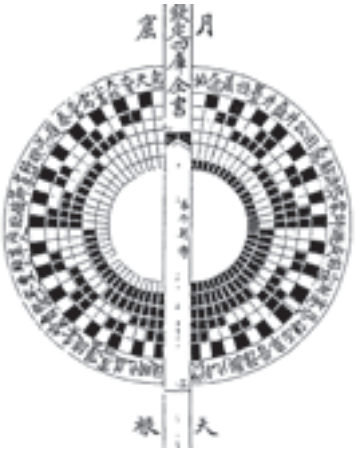
朱子「先天圖は復卦から乾卦に到るまでは陽に屬す。姤卦から坤卦に到るまでは、陰に屬す。陽は人をつかさどり、陰は物をつかさどる。『手探足躡』というが、大して意味はない。ただ、先天圖において、姤卦は上に、復卦は下に位置している。上は『手探』と言い、下は

『足躡』と言うのだ。　［輔廣］

〔注〕

（1）**何巨源**　字は進之。朱子の師友弟子。『文集』卷五十九「答何巨元」に見える。陳榮捷『朱子門人』（五二頁）を參照。

（2）**月窟天根**　月中の岩穴。月中。月の出る所。「西厭月窟、東震日域」（『漢書』揚雄傳「長楊賦」）。天根は星宿の名、氐宿のこと。「天根見而水涸」（『國語』）の注に「天根爲亢氐之間」、「氐爲天根」（『史記』天官書）、「天根氐也」（『爾雅』）とある。ただし、邵雍は「乾遇巽時觀月窟、地逢雷處見天根」（「觀物吟」）と述べており、傳統的な「月窟天根」説とは異なる。朱子によると、「天根月窟指復姤二卦而言」（『文公易説』卷一）と、復卦（天根）と姤卦（月窟）であるとする。具體的には、先天圖を復卦から時計回りして乾卦に到るまでの半分と、姤卦から時計回りして坤卦に到るまでの半分に分け、最初の一陽が兆す復卦と、最初の一陰が兆す姤卦をもってそれぞれ天根と月窟に譬えている。「天根月窟」をめぐる議論は、黄宗羲『易學象數論』（卷一）「天根月窟」に詳しい。なお、「天根月窟」を内丹思想から浮き彫りにした論考として、三浦國雄「天根月窟詩の展開」（『中國文人の思想と表現』汲古書院、二〇〇〇）が參照される。



〔圖版〕先天天根月窟圖
（宋末元初・俞琰『易外別傳』所收）

（3）邵雍の「觀物吟」の一首。「耳目聰明男子身、洪鈞賦與不爲貧、因探月窟方知物、未躡天根豈識人。乾遇巽時觀月窟、地逢雷處看天根。天根月窟間來往、三十六宮都是春」（『伊川擊壤集』卷十六「觀物吟」）

（4）邵雍の「大筆吟」「秋懷三十六首」に見える。「有客無知、爲性太質。不忮不求、無固無必。足躡天根、手探月窟。所得之懷、盡賦于筆」（『伊川擊壤集』卷十四「大筆吟」）、「水寒潭見心、木落山露骨。始信天無涯、萬里不隔物。脱衣掛扶桑、引手探月窟。不負仁義心、區區五十一」（『伊川擊壤集』卷三「秋懷三十六首」）

【51】(校1)問「康節云『天根(校2)月窟間(校3)來往、三十六宮(1)都是春。』(2)蓋云天理流行、而已常周旋乎其間。天根月窟是箇總會處、如『大明終始、時乘六龍』(3)之意否。」曰「是。」　［廣］

〔校注〕

（校1）楠本本は、本條なし。

（校２）正中書局本は、「間」を「官」に作る。
（校３）正中書局本、和刻本は、「間」を「閑」に作る。
〔譯〕
質問　康節先生は『（一陽が）天根月窟の間の三十六宮を往來するから、三十六宮はすべて春である』と仰いました。思うに天理は流行し、常に天根月窟の間を周旋することから、天根月窟は天理の総じて會通する所であると思いますが、それは乾卦彖傳に云う『大いに終始を明らかにし、時に六龍に乘す』と同様の意味でしょうか。
朱子　そうだ。　［輔廣］
〔注〕
（１）**三十六宮**　黄宗羲『易學象數論』に「三十六宮」をめぐる六説が紹介される。①乾一＋兌二＋離三＋震四＋巽五＋坎六＋艮七＋坤八＝三十六と、八卦の數を順次合わせた數。「一陽之來、則融貫於三十六宮、無非春。意三十六宮乾一兌二、則三宮也。離三震四、合三與四、則爲七、則以三乘七、十宮也。巽五坎六、合五與六爲十一、以十乘十一、則二十一宮也。艮七坤八、合七與八、則十五、以二十一乘十五、則三十六宮也。」（宋・能節編、能剛大注『性理群書句解』卷四）、「何謂三十六宮。乾一兌二離三震四巽五坎六艮七坤八、是也。」（宋末元初・俞琰『易外別傳』）。②乾一＋坤八＝九、兌二＋艮七＝九、離三＋坎六＝九、震四＋巽五＝九。九×四＝三十六。「乾一對坤八、以至震四對巽五、以八宮而成。四九三十六。」（明・鮑寧『天原發微』卷四下）③八卦の畫數を基準に換算する説。「三十六宮、此就先天八卦圖、看以八卦圓圖言之、乾三畫坤六畫則數九也。震坎艮各五畫則數十五也。巽離兌各四畫此數十二也。合之爲三十六。」（宋・能節編、能剛大注『性理群書句解』卷四）④不易卦（乾・坤・坎・離・頤・中孚・大過・小過）と反易卦（二十八卦）を合わせた數とする説。「卦之不易者有八、反易者二十八合之爲三十六、方虚谷。」⑤「復起子左得一百八十日、姤起午右得一百八十日、一旬爲一宮、三百六十日爲三十六宮。」⑥十二消息卦の卦畫の數を換算する説。「以十二辟卦言者、一鮑魯齋曰、自復至乾六卦、陽爻二十一、陰爻十五、合之則三十六。自垢（姤）至坤六卦、陰爻二十一陽爻十五、合之亦三十六。陽爻陰爻總七十二以配合言。故云三十六。」（『易學象數論』卷一「天根月窟」）
（２）邵雍の「觀物吟」に見える。【50】條の注（３）を參照。
（３）『易經』乾卦彖傳の文。「大哉乾元。萬物資始、乃統天。雲行雨施、品物流形。大明終始、六位時成、時乘六龍以御天。乾道變化、各正性命、保合大和、乃利貞。」（乾卦彖傳）とあり、朱子注に「始即元也、終謂貞也、不終則无始、不貞則无以爲元也。此言聖人大明乾道之終始、則見卦之六位各以時成、而乘此六陽以行天道、是乃聖人之元亨也。」と解している。

【52】「三十六宮都是春。」易中二十八卦翻覆成五十六卦、唯有乾坤坎離大過頤小過中孚八卦、

反覆只是本卦。以二十八卦湊此八卦、故言「三十六」也。　［寓］

〔校注〕

なし。

〔譯〕

「三十六宮はすべて春である」とは、易六十四卦中の二十八卦は逆さまにして五十六卦をなす。ただ、（内外の卦形が同じである）乾䷀坤䷁坎䷜離䷝大過䷛頤䷚小過䷽中孚䷼の八卦は逆さまにしても本卦に戻る。二十八卦をこれらの八卦に合わせるから、「三十六」と言うのだ。

［徐寓］

【53】「康節詩儘好看。」道夫問「舊無垢(1)引心贊云『廓然(2)心境大無倫、盡此規模有幾人。我性即天、天即性、莫於微處起經綸。』(3)不知如何。」曰「是殆非康節之詩也。林少穎(4)云『朱内翰作。』(5)次第是子發也。」問「何以辨。」曰「若是真實見得、必不恁地張皇。」道夫曰「舊看此意、似與『性爲萬物之一原』(6)而心不可以爲限量同。」曰「固是。但只是摸(校1)空(7)說、無著實處(校2)。如康節云『天向一中分造化、人從心上起經綸』(8)、多少平易。實見得者自別。」又問「一中分造化」。曰「本是一箇、而消息盈虚便生陰陽。事事物物、皆恁地有消便有息、有盈便有虚、有箇面便有箇背。」曰(校3)「這便是自然、非人力之所能爲者。」曰「這便是生兩儀之理。」　［道夫。賀孫錄云(校4)「『廓然心境大無倫』、此四句詩、正如貧子說金、學佛者之論也。」］

〔校注〕

（校１）楠本本は、「摸」を「模」に作る。

（校２）楠本本は、「實處」を「實處也」に作る。

（校３）楠本本は、「曰」を「道夫曰」に作る。

（校４）楠本本は、「賀孫錄云」を「又葉賀孫錄云」に作る。

〔譯〕

康節の詩はとにかくよい。

道夫「もともと無垢（張九成）は、「心」に關する「贊」を引いて『大きな心境は大きくて類が無く、この大きさを盡くす人は幾人いることだろう。我が性は即ち天、天は即ち性。微處において經綸を起こすことなからん』と言いましたが、いかがなものでしょうか。

朱子「これは康節の詩ではないだろう。林少穎（林之奇）が朱内翰の作と言っていて、子發（朱震）のことだ。」

道夫「どうしてそれが分かるのでしょうか。」

朱子「もし本当に分かっているのであれば、きっとそういうふうに回りくどくないはずだ。」

道夫「もともとその意味を考えますと、(張載の)『性は萬物の一原』であり、心は限りがないという意味と同じように見えますね。」

朱子　そうだ。ただ、なかなかつかめない説で實體がない。康節のいう『天は一中に向かいて造化を分かつ、人は心より經綸を起こす』とは、多少平易であることは自ずと分かる。

質問「一中分造化」はいかがですか。

朱子「本來は一つであるが、消息盈虚すれば、陰陽を生ずる。事物はすべて消えればまた生じ、滿ちればまた欠け、面があればまた背(うら)がある。」

朱子「それは自然であり、人の力で爲せる者ではない。」

朱子「それがつまり兩儀を生む摂理なのだ。」　[楊道夫。楊賀孫の記録に云う、『廓然心境大無倫』のこの四句の詩は、まさに貧しい者が金を説くようなもので、佛學を學ぶ者の論である。]

〔注〕

(1) **無垢**　宋・張九成のこと。字は子韶。自ら無垢居士と號す。紹興二年に進士となる。『孟子傳』『中庸説』『横浦集』『尚書詳説』を著す。ただし、「每條皆首列張九成之説、似即本九成所著尚書詳説而雄廣之、故陳振孫頗疑其出於偽托、然九成詳説之目、僅見宋志。」(『四庫提要』「尚書精義」)と、『尚書詳説』は現存していないものの、宋・黄倫『尚書精義』に每條に「無垢曰」と引き、その詳細を知ることができる。

(2) **廓然**　はるか大きなさま。

(3)「無垢曰、蓋念則能明德愼罰、(中略)孟子曰、盡其心者知其性也。知其性、則知天矣。邵堯夫作盡心知性。贊曰廓然心境無大倫、盡此規模有幾人。我性即天、天即性、皆于微處起經綸至矣哉。斯言夫心即性、性即天、心體甚大盡之者少耳。」(宋・黄綸『尚書精義』卷三十四(周書・康誥「裕乃身不廢在王命」條の注)

(4) **林少穎**　宋・林之奇。字は少穎。號は拙齋。呂祖謙の師。官は校書郎。著述に『尚書集解』『春秋周禮講義』『論語注』『孟子講義』『揚子講義』などがある。『宋史』卷四百三十三、『宋元學案』卷三十六に傳がある。

(5) **朱内翰**　朱震(一〇七二～一一三八)、字は子發。

(6)「性者萬物之一原、非有我之得私也。惟大人爲能盡其道、是故立必俱立、知必周知、愛必兼愛、成不獨成。彼自蔽塞而不知順吾理者、則亦未如之何矣」(張載『正蒙』誠明篇第六)。なお、「性者萬物之一原而具於人之一心、心之量本大也。人能大其心之量、則視天下之物爲一體、而無所不包。苟一物有未體、則心爲有外、而其量不盡矣」(清・王直『正蒙初義』)を參照。

（7）**摸空**　　手探りしてもモノがつかめない。

（8）「一物其來有一身、一身還有一乾坤、能知萬物備於我、肯把三才別立根。天向一中分體用［又云造化］、人於心上起經綸。天人焉有兩般義［又云事］、道不虛行只在人。」（『伊川擊壤集』「觀易吟」）

【54】(校)康節煞(1)有好說話、近思錄(2)不曾取入。近看文鑑(3)編康節詩、不知怎生「天向一中分造化、人於心上起經綸」底詩却不編入(4)。　　［義剛］

〔校注〕

（校）楠本本は、本條なし。

〔譯〕

康節（の作品）はほんとうによい話があるが、『近思錄』は取り入れていない。近年になって『宋文鑑』が康節の詩を編んだが、どうしてか「天向一中分造化、人於心上起經綸」の詩は入っていない。　　［黄義剛］

〔注〕

（1）**煞**　　はなはだ

（2）**近思錄**　　朱熹・呂祖謙共撰。宋の道學者、周濂溪・程明道・程伊川・張横渠の四人の言を取り、修身・齊家・治國、日常に切要なもの六百二十二條を抄出し、道學の要旨を示した書。

（3）**文鑑**　　呂祖謙撰『宋文鑑』。一百五十卷。宋の呂祖謙の奉勅撰。宋一代の文集で詩賦も有韻の文として收め、七十七門に分けている。はじめ聖宋文海といったが周必大が旨を奉じて序を作るに及び、皇朝文鑑と改め、商輅の序に至って、また宋文鑑と改めた。（『四庫全書提要』總集類）。以上は、近藤春雄『中國學藝大事典』（大修館書店）による。

（4）『宋文鑑』に收められている邵雍の擊壤詩は、以下の通り。「觀易吟」は入っていない。「洛陽懷古賦」「四事」「高竹」「冬至」「晩涼聞步」「重九日登石閣」「悟人一言」「閒居吟」「仁者」「清風短吟」「閒行吟」「洛下園池」「答人語名教」「何事吟」「觀三皇」「觀五帝」「觀三王」「觀五伯」「觀七國」「觀嬴秦」「觀兩漢」「觀三國」「觀西晉」「觀十六國」「觀南北朝」「觀隋」「觀有唐」「觀五代」「觀盛化」「問鼎」「安樂窩」「自咏」「首尾吟」「蒼蒼吟寄李審言」「林下」「安樂四吟」「自和打乖吟」「歲寒」「四賢吟」「天人」「禁煙留題錦屏山下」「懶起」

【55】(校)康節以品題風月自負、然實強似皇極經世書。　　［方。季通語］

〔校注〕

（校）楠本本は、本條なし。

〔譯〕

康節は「風月」を品評することを得意としたが、實に『皇極經世書』に勝るものがある。［楊方。蔡季通の語］

【56】康節之學、其骨髓在皇極經世、其花草便是詩。直卿云「其詩多說閒(校)靜樂底意思、太煞把做事(1)了。」曰「這箇未說聖人、只顏子之樂(2)亦不恁地。看他詩、篇篇只管說樂、次第樂得來厭了。聖人得底如喫飯相似、只飽而已。他却如喫酒。」又曰「他都是有箇自私自利底意思、所以明道有『要之不可以治天下國家』(3)之說。」　［道夫］

〔校注〕

（校）正中書局本・和刻本は、「閒」を「閑」に作る。

〔譯〕

康節の學問は、その骨髄は『皇極經世書』にあり、その花草に當たるのは『擊壤詩』である。

直卿　「その詩の多くは閑靜の樂の意味を説いており、意識的に取り組んでいますね。」

朱子　「（康節の）詩は聖人を説いていない。顔子の樂はそうでない。康節の詩をみると、どれもひたすら閑靜の樂を説いていて、だんだん厭きてくる。聖人が道を得ることは、飯を食うことに似ていて、滿ち足りる。しかし康節は酒を飲むようなことだ。」

朱子　「康節の詩にはつねに自私自利の意があり、そのため明道先生は『要は天下國家を治めることはできない』説であるという。」

〔注〕

（1）**把做事**　（努力して取り組むべき）事柄とみなす、意識的に取り組む。（垣内景子編訓門人研究會譯注『朱子語類譯注』卷百十三～百十六（汲古書院）二三一頁を參照）

（2）**顔子之樂**　『論語』雍也篇に「子曰、賢哉、回也。一簞食、一瓢飲、在陋巷。人不堪其憂、回也不改其樂。賢哉、回也。」とあり、朱注に「顔子之貧如此、而處之泰然、不以害其樂、故夫子再言賢哉回也、以深歎美之。」とある。『語類』卷三十一に「顔子之樂平淡、曾點之樂已勞攘了、至邵康節云、真樂攻心不柰何、樂得大段顛」（論語十三、雍也篇二「賢哉回也章」）とある。また『語類』卷一百二十に「閭丘次孟言、嘗讀曲禮遺書康節詩、覺得心意快活。曰、他本平鋪地說在裏、公却帖了箇飛揚底意思在上面、可知是恁地。康節詩云、真樂攻心不柰何。某謂此非真樂也、真樂便不攻心。如顔子之樂、何嘗恁地。」（朱子十七「訓門人八」）とある。

（3）「談禪者雖説得、蓋未之有得。其徒亦有肯道佛卒不可以治天下國家者、然又須道得本則可以周遍。」（『二程遺書』卷二上「元豐己未呂與叔東二先生語」）

【57】邵堯夫詩「雪月風花未品題。」(1)此言事物皆有造化。　［可學］

〔校注〕

なし。

〔譯〕

邵雍の詩「雪月風花、未だ品題せず」とは、あらゆる事物に造化の理があるということだ。［鄭可學］

〔注〕

（1）「堯夫非是愛吟詩、爲見聖賢興有時。日月星辰堯則了、江河淮濟禹平之。皇王帝伯經褒貶、雪月風花未品題。豈謂古人無闕典、堯夫非是愛吟詩。」（『伊川擊壤集』「首尾吟」）

【58】(校)邵堯夫六十歲作首尾吟百三十餘篇(1)、至六七年間終。渠詩玩侮一世、只是一箇「四時行焉、百物生焉」(2)之意。　［璘］

〔校注〕

（校）楠本本は、本條なし。

〔譯〕

邵堯夫は六十歳に首尾の吟百三十餘篇を作り、六・七年間にして終わる。（康節の）詩は一世を味わい、その意味はただ一つ『四時行われ、百物生ずる』ということだ。　［滕璘］

〔注〕

（1）『伊川擊壤集』「首尾吟」一百三十五首

（2）「子貢曰、子如不言、則小子何述焉。子曰、天何言哉。四時行焉、百物生焉、天何言哉。」（『論語』陽貨篇）

【59】先生誦康節詩曰「施爲欲似千鈞弩、磨礪當如百鍊金。」(1)或問「千鈞弩如何。」曰「只是不妄發。如子房之在漢、謾說一句、當時承當者便須百碎。」　［道夫］

〔校注〕

なし。

〔譯〕

先生は康節の詩を誦して曰く、「施し行うは千鈞の弩に似たらんことを欲し、錬磨するは當に百錬の金の如くなるべし」と。

ある人「千鈞の弩とは何でしょうか。」

朱子「妄りに發しないことだ。張子房が漢にいた際、謾に一句を説くと、當時當った者は百碎した。」　［楊道夫］

〔注〕

（１）「何事教人用意深，出塵些子索沉吟。施爲欲似千鈞弩，磨礪當如百鍊金。
釣水誤持生殺柄，著棋閑動戰爭心。一盃酒美聊康濟，林下時時或自斟。」（『伊川擊壌集』「何事吟寄三城富相公」）

【60】康節詩云「幽暗巖崖生鬼魅、清平郊野見鸞凰(校1)(1)。」聖人道其常、也只是就那光明(2)處理會說與人。那幽暗處知得(校2)有多少怪異。　［僩］

〔校注〕

（校１）楠本本は、「凰」を「皇」に作る。

（校２）楠本本は、「知得」を「知得是」に作る。

〔譯〕

康節の詩に言う。「幽暗の巖崖、鬼魅を生じ、清平の郊野、鸞凰を見る」と。聖人はその常なるを言い、またその光明なるところを人々に説くのだ。かの幽暗なところに、多かれ少なかれ不合理で怪しさがあるということを知ることだ。　［沈僩］

〔注〕

（１）「一般顔色正蒼蒼、今古人曾望斷腸。日往月來無少異、陽舒陰慘不相妨。迅雷震後山川裂、甘露零時草木香。幽暗巖崖生鬼魅、清平郊野見鸞凰。千花爛爲三春雨、萬木凋因一夜霜。此意分明難理會、直須賢者入消詳。」（『伊川擊壌集』「蒼蒼吟寄答曹州審言龍圖」）

（２）**光明 ..... 幽暗**　『語類』に「心屬火，緣是箇光明發動底物、所以具得許多道理。」（卷第五性理二「性情心意等名義」）、「人常恭敬、則心常光明」（卷第十二學六「持守」）、「人之一心、本自光明」（卷第十五大學二「經下」）「孔子曰、聽其言也厲。公只管恁地、下梢不好。見道理不分明、將漸入於幽暗、含含胡胡、不能到得正大光明之地。」（卷第一百一十四、朱子十一「訓門人二」）と散見される。人の心は光明なるものであるが、道理を見極められないことで曖昧で薄暗いところに陥り、正大光明なる地平に至ることができないという。

【61】康節曰「思慮未起、鬼神莫知、不由乎我、更由乎誰(1)。」此間有術者(2)、人來問事、心下默念、則他說相應。有人故意思別事、不念及此、則其說便不應(校1)。問姓幾畫、口中默數、則他說便著。不數者、說不著(3)。　［義剛］(校2)

〔校注〕

（校１）楠本本は、「有人故意～便不應」の十七字を「不念則説不應」の六字に作る。

（校２）楠本本は、「義剛」の二字を「淳。按黄義剛錄同」の七字に作る。

〔譯〕

康節は言う、「思慮起こらず、鬼神知る莫し。我に由らざれば、さらに誰にか由らん」と。この間、占者のところに人がやって來て事を問うた時のこと、心のなかで默念すると、占者の口がそれに反應した。（今度は）わざと違う事を考えると、占者は反應しなかった。自分の姓が幾畫かを問い、そのことを默って口の中で數えると、占者は反應し、（今度は逆に）數えないと反應しなかった。　［黄義剛］

〔注〕

（１）『擊壤集』「思慮吟」に據る。

（２）術者　占者のこと。

（３）「賴省幹占法有鬼附耳。語人來占者、問姓幾畫、名幾畫。其人對面默數、渠便道得、或預記定其畫、臨時更不默數、只問及便答。渠便道不得、則思慮未起、鬼神莫知。康節之言、亦見破此精微處。」（宋・陳淳『北溪字義』卷下「論妖怪」）

【62】(校)因論學者輕俊者不美、朴厚者好(1)、因說「章惇(2)邢恕(3)當時要學數於康節、康節見得他破、不肯與之。明道亦識得邢、語錄中可見(4)。凡先生長者惜才、不肯大段說破、萬一其有回意。」揚因問「當時邵傳與章邢、使其知前程事時、須不至如此之甚。」曰「不可如此說。」後又問。云「使章邢先知之、他更是放手做、是虎而翼者也。」又因說「康節當時只是窮得天地盈虛消息之理、因以明得此數。要之、天地之理、却自是當知、數亦何必知之。伊川謂『雷自起處起(5)』。何必推知其所起處。惟有孟子見得、曰『莫非命也、順受其正(6)。』但有今日、都不須問前面事。但自盡、明日死也不可知、更二三十年在世也不可知。只自修、何必預知之。」［揚］

〔校注〕

（校）楠本本は、本條なし。

〔譯〕

ちなみに（先生は）「學者は輕俊な者はよくなく、朴實な者がよい」と論じられ、「當時、章惇・邢恕は康節に數を學ぼうとしたが、康節は彼らを見破り、受け入れなかった。明道先生も邢恕と面識があったことは、『語錄』で見ることができる。およそ先生や年長者は、その才を惜しんで説破しないものだが、萬一、（自ら）氣持ちを改めることもあろうと思うからである。」と仰った。そこで、包揚は質問した。

包揚「當時、康節は章惇・邢恕に傳える際に先のことを知らせていれば、そこまで酷いことにならなかったでしょうね。」

朱子「そうとは言えない。」

後日、また質問した。

包揚「章惇・邢恕に先に知らせていたら、さらに彼らは手を打って、それこそ虎に羽ということになってしまったでしょうね。」

朱子「當時、康節は天地盈虚消息の理を窮め、それによって數を明らかにした。要するに、天地の理は（數を介せず）自ずから知ることができるはずなのに、どうして數を知る必要があろう。伊川が『雷は起こるところから起こる』と言ったように、どうしてその起こるところを推して知る必要があろうか。孟子は分かっていた。『命に非ざるは莫し。命に順って其の正しきを受ける』と。今日という日があれば、先の事を問う必要はない。ただ自ら盡くすだけだ。明日死ぬかも分からないし、更に二・三十年、生きるかも分からない。ひたすら自ら修養する。どうして預め知る必要があろう。」　［包揚］

〔注〕

（1）「學者輕俊者不美、朴厚者好」（『語類』卷第一百二十一、朱子十八「訓門人九」）

（2）**章惇**　宋、浦城の人。字は子厚。王安石その才を愛し、編修三司條例官となし、哲宗の時、知樞密院事に進んだが、劉摯・蘇轍等に擊たれて知汝州に左遷される。高太后崩ずるや、尚書左翼射・兼門下侍郎に起用され、その黨、蔡京等を引いて、熙豐の政に復し、元祐の黨人を排す。徽宗の時、睦州に累貶される。（『宋元學案』卷九十六）、「紹聖初、章惇爲相。惇嘗事康節、欲用伯溫、伯溫不往。會法當赴吏部銓、程頤爲伯溫曰、吾危子之行也。伯溫曰、豈不欲見先公於地下耶。至則先就部擬官、而後見宰相。惇論及康節之學、曰嗟乎、吾於先生不能卒業也。」（『宋史』卷四百三十三「儒林三」邵伯溫）

（3）**邢恕**　宋、鄭州陽武縣（河南省）の人。字は和叔。程顥に師事し、高官司馬光・呂公著の門に出入りし、若くして聲名あった。進士に及第し、御史中丞にまで累遷した。人物は明弁達才で世事に練達し、禪學に傾倒していたとされる。邢七ともいう。『宋史』四百七十一「姦臣一」、及び『宋元學案』卷三十、卷九十六にその傳がある。

（4）「神宗問明道以張載邢恕之學、奏云張載臣所畏、邢恕從臣游。」（『二程外書』）

（5）**雷自起處起**　「邵堯夫謂程子曰、子雖聰明。然天下之事亦衆矣。子能盡知邪。子曰、天下之事、某所不知者、固多。然堯夫所謂不知者何事。是時適雷起。堯夫曰、子知雷起處乎。子曰、某知之堯夫不知也。堯夫愕然曰、何謂也。子曰既知之安用數推也。以其不知、故待推而後知。堯夫曰、子以爲起於何處。子曰、起於起處、堯夫瞿然稱善。」（『二程遺書』「師説」）

（6）「孟子曰、莫非命也、順受其正。是故知命者、不立乎巖牆之下。盡其道而死者、正命也、桎梏死者、非正命也。」（『孟子』盡心下篇）

【63】(校)康節謂章子厚(1)曰「以君之才、於吾之學、頃刻可盡。但須相從林下一二十年、使塵慮(2)銷散(3)、胸中豁無一事、乃可相授。」　［驤］(4)

〔校注〕

（校）楠本本は、本條なし。

〔譯〕

康節は章子厚に言った。「君の才能を吾が學問においてほんの少しの間盡くすこと許す。ただし、お互いに十・二十年間、林の下で鄙俗な考えを振り落とし、胸のなかが広々として何もなくなれば、學問を授けよう。」　［楊驤］

〔注〕

（1）章子厚　　章惇。【62】の注（2）を參照。

（2）塵慮　　鄙俗で汚れた考え。

（3）銷散　　消え散る

（4）記錄者の楊驤。字は子節、楊道夫の從兄。『宋元學案』卷六十九に「朱子が易・禮を授けし弟子」とある。

【64】(校)康節數學源流於陳希夷。康節天資極高。其學只是術數學、後人有聰明能算、亦可以推。建陽舊有一村僧宗元、一日走上徑山、住得七八十日、悟禪而歸。其人聰敏、能算法、看經世書、皆略略領會得。　［揚］

〔校注〕

（校）楠本本は、本條なし。

〔譯〕

朱子「康節の數學は陳希夷に源流する。康節の天賦的才能は極めて高い。その學問は術數學であり、後人が聰明でよく數學ができれば、その學問を推察することができる。昔、建陽のある村に宗元という僧侶がいたが、一日で徑山を驅け上って、七・八十日間住み、禪を悟ってから村に歸った。その人は聰明鋭敏でよく算術ができたのだが、『皇極經世書』を讀んで、ほぼすべて分かった。」　［包揚］

Notes on Japanese Translation of *Shao Tzu Chih Shu*邵子之書 The 100th Book of *Chu Tzu Yü-lei* 朱子語類 Series : Part 3

SHIN Hyeon

This paper contains the notes on the Japanese translation of the Chinese *Shao Tzu Chih Shu*邵子之書. The 100th book of *Chu Tzu Yü-lei* 朱子語類 series.

Chu Tzu Yü-lei consists of 140-volume books. It was compiled from the transcripts of dialogues between Chu Hsi 朱熹 and his disciples in the form of Written Vernacular Chinese. *Shao Tzu Chih Shu* covers their dialogues on the studies and concepts of Shao Yung邵雍.

Shao Yung (1011-1077) was a Northern Song Dynasty Chinese Philosopher with its Courtesy name of Yao-fu 堯夫. After his death, he was presented the posthumous name of Kang-chie康節.

Shao Yung was allegedly taught *T'u-Shu Hsien-T'ien Shang-Shu School of I Ching* 圖書先天象數學 (experimental approach using image-number for the philosophical interpretation of divination) from Li Chih-ch'ai 李之才. Li Chih-ch'ai was one of the successors to the tradition of the art of divination. It has been colored by the characteristics of Taoists as represented by Chên T'uan陳摶.

As well as Shao Yung had followed these concepts of divination, he made several-decade-long efforts to establish its new art called as Hsien-T'ien I 先天易. He turned out to develop is original philosophy.

The essential concept of Hsien-T'ien I is *Kuan-Wu* 觀物. This concept amounts to reveal Tao (the conceptual path to keep the world balanced and ordered) by taking the following two steps. One is to think over the generation, development, and appearance of the universe. The other is to make a systematic understanding of human existence and its meaning.

Shao Yung thought that Hsien-T'ien I could return to clarify Confuciannature and his philosophy. This perspective was related to establish Tao Hsüeh 道學. Eventually he became he became known as one of the Five Confucian Masters of Northern Song.

His important works a series of *Book of supreme world ordering principles* 皇極經世書. All the books of this series are titled *Kuan-Wu Nei-P'ien* 觀物內篇. For these books, Shao Yung drew on all his knowledge of the Shang-Shu (image number) theory, astronomy, and almanac derived from the studies on the divination in Han dynasty. On the other hand, he made a general survey of generating and developing the universe throughout this series.

This paper attempts to translate *Shao Tzu Chih Shu* as a clue to become aware that Chu Hsi understood Shao Yung's perspective on the art of divination.